

『百人一首』 中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力 (五)

かささぎの渡せる橋におく霜の 白きを見れば夜ぞふけにける

お伴家持  
大伴家持

〈歌意〉

「天上の橋ともいふべき宮中の橋に降りた霜が真つ白に光っているのを見ると、かなり夜も深くなつたことだと思われる。」この歌は『古今和歌集』（冬・六二〇番）に出ています。7月7日に烏鵲（うじやく・カササギ）が天の川に橋を架けて織女を渡すという中国の伝説に基づき、宮中を天にたとえ、宮中の橋を「かささぎの橋」としています。

（大伴家持）

七一七年？～七八五年。大伴旅人の子。『万葉集』の編者を家持とする説があります。

かささぎの  
渡せる橋に  
おく霜の  
白きを見  
れば夜ぞ  
ふけにける

〈字母〉

閑佐、幾の

わ多せ類者しに

お

久し毛能

し路支越ミれハ夜そ

不計二介る

中村素堂先生の書

大島香菊様提供

六首目は、前回の「木立式」の逆で頭を揃えた「下り藤式」で書かれています。（中村青藍）